

大齋節も5番目の日曜日になりました。本来洗礼準備のために設定された大齋節だからでしょうか、最初の、イエス様が受けた荒野の誘惑の話の後は、ユダヤ教の指導者であるニコデモ、サマリアの女性、そして生まれつき目の見えない人などが、イエス様との出会いによって、新しい信仰に目覚め、立ち上がらされたお話が続きました。

そして、今日は、イエス様が親しくしていた、マルタとマリアの兄弟ラザロが死んでいたのに墓から起き上がって、出てきた、という奇跡物語です。この福音書を読んでゆくと、イエス様が捕えられ、十字架に架けられる、直接の原因は、このラザロを蘇らせたことが引き金のようなのです。今日の福音書に続く箇所の見出しは、「イエスを殺す計画」となっています。イエス様のグループに人気が出て、ユダヤ教の指導者たちを脅かす勢力になることを恐れたためのように説明されています。

ところが、不思議なことに、他の三つの福音書では、ラザロが復活した話が出てきません。ルカによる福音書では、マルタとマリアの姉妹については、マルタがイエス様にマリアのことでグチをこぼす話が出てきても、ラザロは出ません。また、金持ちとラザロのお話は出てきますが、このラザロは死んだ後アブラハムのところに行って、幸せにしていることで終わっています。死んだ金持ちが、ラザロを蘇らせて、自分の家族のところへ遣わすように、頼むのですが、それはかないませんでした。

そして、他の福音書では、イエス様が逮捕されて、十字架に架けられた原因は、イエス様がロバに乗ってエルサレムへ入られた後、エルサレムの神殿の庭で大暴れをしたことでした。ところが、このヨハネによる福音書では、イエス様の大暴れは、はやばやと、2章で、水をぶどう酒に変えたカナの婚礼の話の次に登場してくるのです。

ですから、私たちがイエス様の生涯について、客観的に時間を追って頭に描く場合は、他の三つの福音書を念頭において考えた方がいい。しかし、そのイエス様の生涯の意味を考える場合に、このヨハネによる福音書が大変有効な福音書になるという風に、区別した方がいいのではないかと、思います。

つまり、ラザロの復活ということは、歴史的な出来事と言うよりも、奇跡物語の形をしたたとえ、イエス様のことを説明するたとえ話というふうにとらえた方が、そのメッセージを私たちは受け取りやすいように感じるのです。

それでは、ヨハネによる福音書が語ろうとしている、イエス様の生涯の意味とは何でしょうか？

皆さんはもう何度も読まれたでしょうが、この福音書の20章の終わりには、「本書の目的」ということが書かれています。

『30 このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさしたが、それはこの書物に書かれていない。31 これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。』

「命を受けること」ですね。3週前に、宮崎でニコデモの話をした時、3章16節は、とても大切な聖句だということを話しましたが、それは、この目的の言葉と呼応して、重要です。

『16 神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。』ここでも、命が強調されています。

さて、そろそろ福音書の中味に入って行きましょう。

この福音書で、私たちが疑問に思ったり驚いたりすることは、いくつもありますが、今日注目したいのは、「イエス様の憤り」ということです。この憤りが、2回も登場してくるので、皆さんも気づかれたでしょう。

32節から38節まで読んでみます。

『11:32 マリアはイエスのおられる所に来て、イエスを見るなり足もとにひれ伏し、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と言った。

11:33 イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して、

11:34 言われた。「どこに葬ったのか。」彼らは、「主よ、来て、御覧ください」と言った。

11:35 イエスは涙を流された。

11:36 ユダヤ人たちは、「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」と言った。

11:37 しかし、中には、「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようにはできなかつたのか」と言う者もいた。

◆イエス、ラザロを生き返らせる

11:38 イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。墓は洞穴で、石でふさがれていた。

最初の憤りは、マリアが泣いたり、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを持ったわけです。

これは、普通考えたら、おかしいですよ。

パウロは、『喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。』（ローマの信徒への手紙 12章15節）と教えています。イエス様も、ここでは、憤らずに、肉親の死を悲しんでいる人と共に泣くべきではないか、と感じます。「憤るなんて、イエス様らしくもない、」と感じてしまいやすいところです。

確かに、35節では、「イエスは涙を流された。」と書かれているのですが、ここで流されたイエス様の涙は、マリアや一緒に来たユダヤ人たちの涙と同じ涙ではなかつたのではないかと私は思います。

イエス様は、このあと、一緒に来たユダヤ人たちの言葉に、2度目の憤りを感じています。

「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようにはできなかつたのか」。このような、発言が、イエス様は許せなかつたのでしょうか。これらの人々は、ラザロが死んだことで、絶望している。葬式を悲劇、悲しいことにしてしまっているのです。

もうだいぶ前に見た映画ですが、黒澤監督の1990年に制作された「夢」というのがあります。これには、8つの小さなお話が次々に出てきて、いわゆるオムニバス形式、いくつかの独立した短編を集め、全体として一つの作品となるように構成したものなんです。

その最後の話の中で、寺尾聡が演じる主人公が、水車のある村に行って、村の老人、笠智衆が103歳の年寄りなんです、その人と、会話する場面がありました。

遠くで楽器の鳴っている音が聞こえるので「今日はお祭りがあるんですか。」と主人公が問うと、老人はこんなことを言います。

「あれは葬式だよ。あんたは変な顔をするが、本来葬式はめでたいものだよ。よく生きて、よく働いて、ご苦労さんと言われて死ぬのはめでたい。この村には、寺もないし坊主もないから、ああやって、丘の上の墓場まで、死んだ人を村中の者が送って行くんじや。もっとも、子供や若い者が死ぬのはいかん。めでたいとはいいいにくいからなあ。」

こんな話でした。誰にだって訪れる死を、悲しんだり、嘆いたりするのは、よくない。めでたいことなのに、どうして、泣いたり、死んだ人のことを過去のことで、思い出にしているのか。そのような批判が、黒澤監督にはあったのでしょうか。それを老人の言葉で言わせているのでしょうか、イエス様もそれと同じことを言おうとされたのではないのでしょうか？

今日の福音書は長いので最初の方は省略しましたが、ラザロが病気であることを知らされたイエス様は、「この病気は死で終わるものではない。」と言われました。

この場合の死、というのは、絶望とか、空しさのような意味を含んでいると思われます。私たちは、肉体を持って生まれたので、最後には、肉体と霊が別れて死を迎えることになるのですが、それが終わりではないのだ。ということでしょう。

コヘレトの言葉12章7節には、こんな言葉があります。

『塵は元の大地に帰り、霊は与え主である神に帰る』

人間は土の塵で造られたけど、神様からの命の息を吹きかけられた。それで生きる者となったのだから、私たちの霊は、死んでも滅びることなく、神様のところに帰れる。その希望を持っていることが、大切なのです。

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」とは、イエス様を信じて死んでいった人には、天国が約束されていて、神様のもとで喜んで生きていけるということです。そして「生きていて私を信じる者はだれも、決して死ぬことはない。」とは、神様のもとで生きて行ける、という希望は、絶望に終わることがない、ということです。

今日のラザロの復活物語のイエス様の憤りは、私たちが悲しいだけの葬式をしてしまっていないか、と問われている問題だと思います。希望を持って歩いていきましょう。